



かなであん

249-0002 逗子市山の根1-7-24

Tel : 046-871-1863 Fax : 046-872-3485

[http:// kanadean.net](http://kanadean.net)

mail: ryukeiji@kanadean.net

仏道へのいざない

秋のお彼岸が巡ってまいりました。生活の中に溶け込んだこれらの宗教的習慣は、日本に生まれ育った人であれば、「自分は無宗教だ神も仏も信じない」と言う人でも、その季節感や年中のサイクルとして擦り込まれているのではないのでしょうか。かといって、日本人が信仰を人生の糧にしているかといえ、必ずしもそうではありません。日本人は宗教が嫌いではないのに、残念ながら「宗教音痴」だと言われています。

* * *

宗教意識調査によれば、国が認可している宗教法人が届け出ている信者数を統計すると、日本の人口を上回る2億人以上にもなるそうです。これは一人の人間が複数の神や仏を信じていることになりませんが、そのことがかえって迷いや問題を生み、信仰をもつということの本来の意味から離れてしまっていることに気づいていないばかりか、むしろ、自分は信心深いのだと自慢する人さえいます。それを宗教学者のひろさちや氏が「浮気者」に例えておられたのを思い出します。

宗教音痴とは浮気者と同じで、そのことで生じる問題よりも、

目先の心地よさを優先してしまい節操なく自分の生活に取り入れてしまい、本来大切にしていかなければならないものをおろそかにします。そして相手が一人でも大変なのに、相手が多くなれば当然迷いも問題も多くなるのです。宗教も、色々な神仏に、その時その時の自分に都合のよいところを取り入れることは、迷いを深め、問題を抱えることになってしまうのです。

日本人の宗教理解は、「宗教的な感じ」のする習慣や形骸化されたものは何でも取り入れ、宗教的というより習俗的なものになりがちで、それは宗教本来の意味を離れ、「そうするものだ」という縛りを生み、やがて、重荷となって宗教嫌いになり、宗教アレルギーや無宗教になる人を生んでいると思われれます。

* * *

人間は宗教と共に生きるという点で他の動物と区別されます。それは人間が勝っているという区別ではありません。人間は、宇宙までのあらゆるものがつながり合っただけで成り立つはずのない「生命の世界」にあって、宗教というものがなければ、その「おかげ」を忘れ、己を是とし、欲は増し、傲慢になり、争いの種に事欠かないからです。

その宗教や信仰というものが生きることからかけ離れたもの

であっては役立ちません。「苦（思い通りにならない）」日々の営みの中に息づいてこそ、私たちを導くものとなり得るのです。ですから、頭や本から理屈や理論で得た宗教では、宗教的人間として本物に育たないと言われるのです。

宗教は「恭敬（くぎょう）」、頭が下がる、敬い、仰ぐ、という行為の対象を持つことを基本とし、「帰依する」ことのもつ元々の意味は「信じます」であり、「尊敬します」「愛します」でもあるということを知れば、信心とは服従するのではなく「慕わしく思うこと」であったと素直に頷けるでしょう。

それは、人生で出会った人が、何となく好ましく羨ましく思われ、あんな風に生きられたらと語り合っている中で、ふと「自分はこういうことを生き方の糧にしている」と語られる。信仰への出逢いとはこういうものなのではないかと思うのです。その人を浄土真宗では善知識というのです。

仏教行事は仏徳讃嘆を機縁とする出逢いの場、「法会（ほうえ）」です。その出逢いによる導きは、親であったり、友であったり、時には子であることもあるでしょう。それこそが良き人（善知識）の私たちを仏道へといざなってくれる尊い法縁なのです。

合掌

奏庵法座
「彼岸会」

日時
9月26日(金)
午前11時

「みほとけに抱かれて」
阿弥陀経
法話 住職
ご文章拝読
「恩徳讃」
～*～
おとき

ひと月いただいた休みの間にも色々な事件、大きな天災もありましたが、皆さまにはお変わりなくお過ごしでしたでしょうか。異常気象と騒ぐのは口ばかりの人間とは比べものにならない自然の律儀さは、きちんと秋を運んでくれ、ススキの穂が光り、階段に咲く数本の彼岸花を目にすると、この季節を法縁とする習わしを守り伝えて下さった先人の智慧と願いの深さを想います。どうぞお参り下さい。



ブッダの教え
「何もない」ことが智慧

智慧とは、特別に「何かがある」ことではありません。じつは「何もない」ことなのです。

心の中に、ある価値観や尺度をもっていると、それに当てはまるものしかみえません。何か知識にしがみついていると、それで頭がいっぱいで、他のものが入らなくなってしまいます。

頭の中に何もない場合は、そのときそのとき、何でも入ってしまい、理解がはやいのです。

さらに、得たものに執着しないで持ち運ばないのが、智慧のある人なのです。

衆会 (しゅうえ)

この庭に あつまるわれら
世のわざの しなこそかわれ
もるともに めぐみにとけて
むつみあう こころの声に
讃仏の うれしきしらべ

みすがたは こころにうつり
み教えは いのちにかよう
われらいま 闇よりさめて
みほとけの ひかりのなかに
法をきく たのしきつどい

「正信偈」を学ぶ

法座の前の10時くらいから共々に正信偈を学ぶ時間を持っています。お時間が許す方は少し早くお出かけ下さり、途中からでも遠慮なくご参加下さい。

朝日新聞の「従軍慰安婦」・福島原発事故の「吉田調書」、誤報問題の報道を聞きながらパソコンに向かっていくと恐くなっていく。毎月この「便り」を書き発送するまでに何度も読み返すのは、「後で読んで書いた自分が嫌にならないかどうか」のためだが、取り消したと思うものばかりだ。■取り返しの付かないものを発表したことなら、STAP細胞の論文疑惑もそうだろう。「はじめに結論なき」は、有望な研究者が自らの命を絶つという事態を生んでしまった。彼が科学にとって大切なのは発見や論理の内容であって人物や人柄ではないことは分かりすぎるほど分かっていただろうに、後になって自分を取り戻し、科学者にあるまじき恥ずかしさに耐え切れなくなったのだろう。■報道も「真実を伝える」使命を持つが、それを書くのは人間であり、書き手の立場や価値観が含まれたものになるのは否めない。情報には「誤報」という言葉では表しきれない、書き手のイデオロギーによって「歪曲」されたものがあるのだという読み手の判断も必要だ。これこそが「絶対正しい」と大上段に言い切れるものなどあるのだろうか、自問することの大切さを知らされる。■宗教を伝えるということはどうだろう。「これこれこういう教えだ」と主張しても、それが読む人を貶めたり尊厳を踏みにじられるように乱暴に感じられるなら、仏教そのものを傷つけることになってしまう。かといって、無難で美しい言葉や、薄っぺらな善悪を並べても教えは伝わらず、信心にまで至らない。説く側の者がまず相手と同じ凡夫であるということをおぼえてはならず、偽善があってはならない。「朝日」が陥っていたのは、仏教が厳しく説く、謙つていながら実はいい子、上からの立場に立つ「傲慢のなかの傲慢」という落とし穴だったと思う。■同じ師、同じ教えに接しても、人それぞれの力量、その時の状況や感情で違ってくるという寛容から生まれた「仏法はお味わい」と言う懐の深さを思うと、「正しく」ではなく「正しいかたち」で伝えなければ…… Norimaru